
櫻の謳

来崎怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

櫻の謳

【Nコード】

N6459F

【作者名】

来崎怜

【あらすじ】

幼い頃に両親を失った市倉要。叔父の元で暮らしながら穏やかに日々を過ごしていたが、ある日一人の少女と出会う。その少女との出会いから、少しずつ日々の生活に変化が現れていく…。

題0：夢現

『ごめんなさい』

遠くで、謝る声がする。

『ごめんなさい、許して』

それが自分に向けられたもののなのか、もしくは誰かに対する呟きなのか。ただ声が聞こえるだけで姿どころか目の前の視界は完全に暗闇に覆われている。

『許さない』

また別の誰かが応えた。やはり姿は見えず、けれど先ほどまでのより随分近く感じる。謝罪する声はひどく寂しげで儚いのに対して、拒絶する声はひどく暗く、そして重い。

『許すものか、お前も、他のやつらも』

『ごめんなさい、許して。私もすぐにそっちへ行くから』

『許さない、よくも私を裏切ったな』

二つの声は呼応しているようで届いてないようだった。その内憎しみで染まった声だけが強くなっていき、寂しい声はやがて小さく遠ざかっていくと、強い声にかき消されるように聞こえなくなった。

『この恨みは忘れない、例えこの身が滅んでも』

一瞬の静寂の後、それは響いた。ビクンと身体が痙攣するのが分かった。それは声に対する恐怖からの震えではなかった。声が声は自分の喉から発せられた、その事に対する驚きと衝撃によるものだった。

全ての恨みを振り絞るような憎しみに満ちた声に思考までが暗闇に満たされていく。忌まわしい言葉が息を塞いで呼吸を奪っていく。息苦しさはすぐに訪れ、水中でもがくように手をかいてみるけれどそこには何もない。ただ闇だけがその世界の唯一で全てだった。そしてやがて腕を動かしていたのが、手、指と鈍くなっていくと、もはや待ち望んでいたようにそこで意識は途切れた。

「…くん、かなめくん…要君！」

けたたましく鳴り響く目覚まし時計の音と、それに負けないぐらの声が再び意識に呼びかけてくる。眠りとそこから覚めようとする意識の間で要は再びその目を開いた。そこにはカーテンの向こうから差し込む光で満たされた淡く白い世界がゆっくりと輪郭を描きながら視界に広がっていく。天井と電気、それからゆっくりと目を動かすと机や本棚、隣の部屋へ続くドア　ごく普通の、見慣れたいつもの景色だ。

「要君つてば、そろそろ起きる時間ですよ…って、何だ起きてるんですか」

さつきから自分を呼ぶ声の主がドアの向こうから顔を覗かせた。ドアを見つめたままの自分と目が合うと困った顔からすぐに穏やかな笑顔へと変えて「おはよう」と付け加えた。そこで完全に目が覚めたように、要は目覚ましを止めると大きな欠伸をしながら腕を天井に向けて目いっぱい伸ばしてみせた。

「おはよう、叔父さん」

着替えを済ませてくるのに合わせていたように、リビングは淹れたてのコーヒーの匂いで満たされていた。すでに朝食の準備は整えられ、トーストと目玉焼きも焼きあがったと言わんばかりの状態で皿に乗せられている。

「今日は叔父さんの方が早起きなんだね、昨日書いてたんじゃないの？」

コーヒーポットからマグカップへと注ぎながら要はふと思い出したように尋ねた。確か夕べは夕食もそこに叔父の旭あきは仕事をす

ると自分の部屋へと去っていった。そういう場合は大抵が徹夜で寝ているか執筆中かのどちらかになることが多い。

「うん、内容はまとめてあったからあとは写すだけだったしね」

よく見ると多少疲れたような顔で彼は笑いながら頷いた。うつすらと無精ひげも見えて、けれど彼の場合はその状態でようやく年相応の雰囲気に見えるようになる。

「次の仕事はいつ？」

「そうだなあ…原稿を持って行った時にちゃんとした打ち合わせの予定だけど、早かったら明後日の週末かな」

背後のカレンダーを振り返りながら叔父が答えると、要の視線も自然とそれを追って日付を確認した。上が風景の写真、下が日付で構成されたカレンダーの写真は鮮やかな緑で飾られたどこかの山の姿だった。確か今日仕上げたという原稿もこんな写真のような場所だったはず、というのを要は思い出しながらパンを一口齧った。

「最近は山登りも普通のところじゃ物足りないのかな、かなり辺鄙なところを選んだのに人と合うと逆に熊よりもビックリしてね」

ちょうど同じことを考えていたのか、こちらから問いかけたわけでもないのに独り言のように相手から話が出てきた。仕事についてはこんな風にきつかけ次第で話す時があれば、こちらからいちいち尋ねることもないのでついには何の取材に行ってきたのか分からない時もあった。

「土地の人じゃないのにその山に詳しくて、お陰で取材もはかどったわけだけど…ガイド料渡せば良かったかなあ」

「その人はただの山登りの人？」

「どうだろうなあ…一緒にいる間、ずっと向こうが話してばかりでこっちが聞く間もなかったし。日が暮れる前に僕は降りたけど、その人はそのまま登って行っちゃったからねえ」

出会った人物はかなり個性が強かったのか、不思議な人だったなあと首を傾げると彼は楽しいことでも思い出したのか一人で小さく笑い始めた。それで話は自然と途切れてしまい、代わりにテレビで

流れていたニュース番組が時刻と同時に次のワイドショー番組へと移り変わった。派手なオープニングの音楽が部屋に流れ出す。

「ん、ごちそうさま」

番組が変わると同時に要はテーブルを立ち上がると自分の分の食器だけを流しへ置いて一度自分の部屋へと消えた。鞆を取って再び戻ると叔父は記憶を探るのを終えたように朝食を再開させ、ワイドショーへと目を移していた。

「それじゃ行つて来るよ」

「はい、気をつけて行つてらっしゃい」

何か嫌なニュースでもあったのか眉間に皺を寄せていた叔父がこちらに向かつて返事をする時にはきつちり笑顔になっているのは、小難しく分析するものではなくもはやそれが彼の反射になっているのかもしれない。

「それじゃ行つてくるよ」

先程リビングで交わしたはずの挨拶を、要は玄関で一人もう一度呟いた。そこには叔父の姿も無い。代わりにそう要が顔を向けた

靴箱の上には透明のガラスで作られたシンプルな写真立てが一つ二本の花とともに置かれていた。

「父さん、母さん」

要は写真立ての中で肩を並べる若い男女と同じ笑顔を浮かべると玄関のドアを勢いよく開けた。柔らかな日差しと心地よい春のどこか夏を想像させる匂いが混じりながら吹き込んでくる。飾られた花が一瞬その風のせいでふわりと浮いたが、すぐにまた同じ場所へと落ちた。

題1：遭遇 - 1 -

校内に昼休みを告げるチャイムが一齐に放送されると、それまで静けさに満ちていた廊下はあつという間に慌しい雰囲気包まれた。鐘が鳴ったばかりだというのにすでに学食でパンを買って戻ってくる生徒もいれば、仲良くお弁当を持って外へ食べに行こうとする姿もあった。

「要、学食行こうぜー」

「分か…、うわっ!？」

机に教科書を片付け終わると、要は椅子から立ち上がるのと同時に肩から首にかけてかけられた重みに思わず膝を曲げて振り返った。そこにはおぶさるような形で催促する達弘の姿があった。

「ちょ、重いから…どけるって」

「だるいからこのまま連れてってくれよー」

一旦折ってしまった膝は伸ばすことが出来ず、こっちの言葉を聞いているにもかかわらずなおも体重をかけてこられれば今にも膝が床につきそうになる。要は机に手について堪えると、再び達弘に向かって促した。

「やだから、どけるって」

「市倉何してんだよー」

少し語気を強めて言うと、それに被せて様子を見ていた他の生徒がおかしそうに軽くからかいの言葉をかけた。冷やかしよりは遠めに和むようなニュアンスを含んではいたものの、子供っぽいじゃれあいに対する言い方にも聞こえたので、おそらくこれ以上続けると機嫌を損ねてしまうだろう。達弘はすぐに離れると、一歩下がって目いっぱい笑顔を作り始めた。

「悪い悪い。ほら早く行かないと席無くなるし」

そして何事も無かったように手招きをするとさっさと教室の外へと出て行ってしまふ。そうなると特に悪意のある冗談でもないの

これ以上怒るわけにもいかず、要はただ一つ溜息だけついて呆れた素振りだけしてみせた。

「良いけど、たまにはお詫びでジュースぐらい奢ってほしいよなあ？」

もう慣れたといっても過言ではないぐらい、彼が自分に対してちよつかいを出す日はほぼ毎日で、思えば進級と同時に行われるクラス替え以来続いている気がした。前年のクラスメイトがほとんどいなかった中で、たまたま後ろになった彼が気さくに話しかけてくれたお陰でこうして休み時間を過ごす相手がすぐに出来たのは嬉しかったが、たまに子供っぽいはずで今のように困ることも少なくない。

「えー、じゃあ自販のパックのなー。今月仕送り少なくてさー」

渋々ながらも承知するのは自分が日頃している事を分かっているからなのか、だとすればすつかり先程までの呆れた気持ちすらも要は失っていた。逆にそうやって落ち込む相手を励ましたいとさえ思えるのは彼の人柄のせいだろうか。

「だったら逆に今日は俺が奢ってやるから今度バイト代が入ったら倍返しな」

「え、マジで!? じゃあしばらく要様にはふざけたりしません」

今度は一転して恭しい言い方になると、その一喜一憂する様について自分までつられてしまいそうになる。別にここは進学校というわけでもない、どこにでもあるような県立高校なのに彼はわざわざ一人暮らしをして通っているというのは聞いている。実家からの仕送りとバイト代で日々やりくりをしているらしいので、そんな彼から本当に奢ってもらうわけにはいかなかった。

「今日は何にするかなー」

「俺、先にジュース買っとく。何にする？」

学食の券売機を前に悩む彼に尋ねながら、要は財布から五百円を取り出してそのまま手渡した。

「代わりに食券。俺はフライ定食で」

「オツケー。俺はコーヒー牛乳……ううん、牛乳とうどんかあ……」

二つのジュースを手にながら、要は食堂内を見回した。ちょうど鐘と同時に入ってきた生徒達が食べ終わる頃らしく、賑わっているもののぼつりぼつりと空席が目立ち始めている。受け取り口の方では達弘が並んでる姿が見える。頼んだ手前ジュースとご飯では手があつた方が良さだろう、要は目印代わりにジュースを空いてる席に置くと自分もと後からついていこうとした。

「あ、市倉」

テーブルの並ぶ場所から通路へと出ると、そこには担任の姿があつた。昼食を終えた後らしく表情はどことなく満足げで、けれど早く職員室へ戻って一服をしたいという雰囲気でもあつた。

「お前、今度の進路調査。そろそろ三者面談の日を決めんな」

何度も言うつうだけれど、と念を押すように付け加えられるとそれだけで要は言葉に詰まつた。最初の内は後で後でと伸ばしてきたものの、提出期限から半月過ぎた今ではただ黙って頷くしかなかった。

「やつぱり一人じゃ、駄目ですか？」

これも何度が交わした言葉だつた。これで駄目ならと諦める気持ちで尋ねた言葉はそんな期待も空しく「駄目だ」の一言で一蹴された。

「事情は分かるが、だからこそ大事な進路なんだ。ちゃんと保護者の方に来てもらわないとな」

事情が分かるなら、そうは思つてもさすがに口には出来ない。仕方なく再度了承するように頷くと、担任はそれで納得したように「今週までな」と言つて今度こそ食後の一服へと行くのだろう。

「何、木下。進路のやつ？」

途中から話を聞いてたのか、両手にそれぞれ食事の乗ったトレイを持った達弘が先程担任がいたその場所に立っていた。特に隠すような話題でもないのだから、要は自分の分のトレイを重い気持ちで受け取った。

「別に：来てもらいたくないわけじゃないんだけど」

席について気を取り直すように食事を前にしながら、要は手にした箸を指先のうで器用にくるっと回した。

「仕事いつあるか分からないし、予定決めててもいきなりとかあるし」

旅行もののエッセイを中心に時には古い時代の遺跡や神社などにも足を運んでそれを記事にする、それが叔父　フリージャーナリスト　国木旭の仕事だった。国内の仕事ばかりだったが北は北海道から南は沖縄までと依頼があれば行くので、日帰りで帰って来る時もあれば一週間たつぷり帰ってこないなどそこには規則性は一切無い。急な仕事の話が入るのもよくある話で、それはフリーの手前というよりは生活のために受けるという表現の方が近い。

「まあでも一日って言うてもほんの一時間だし、それぐらい何とかしてもらうしかないよな」

「うん…」

おそらく面談の話をすれば彼は快く良いというだろうし、仕事のスケジュールの調整もきっちりしてくれるに違いない。仕事のことを言うのはただの言い訳にしか過ぎないことを、要は自分でよく分かっていた。

「進路って言うてもまだ来年の話なのになあ」

「来年でも、ちゃんと決めといたほうが良いって」

「そういう達弘は進路、何て書いた？」

人の進路の心配をする相手に対し、まさか自分が聞かれると思わなかったのか一瞬彼の目が瞬いて要へと視線を返した。とつくに進路希望は提出しているのですんなり答えが返ってくると思ったが、しばらく考える様子を見せてから

「あー：俺、実家に戻るからそれこそ進学関係無いんだよな」

そう答えが返ってきたのに、今度は要の方が驚かずにはいられなかった。一人暮らしをしてまでこっちの高校に来ているのに、と表情に出ていたのかは分からない。けれどこちらをじっと見たまま彼は苦笑すると、その言葉に説明を足してみせた。

「一回出てきてみたかったんだよな、こっちの方。だから実家にもそういう約束だし、終わったら進学せずに仕事手伝うって」

自分で自分の言葉を確かめるようにそう言うと、彼は小さく頷いてみせた。そしてそれ以上の説明も言葉もなく、要としても話を続けるだけの言葉も表情も持ち合わせていないように会話を詰まらせた。さすがに知り合ってまだ二ヶ月にもならない自分に引き止めるだけの強さもないし、かと言って引き止められたところで具体的な助けは何も出来ない。

「そつか。じゃあ俺もちゃんと考えないとな」

「ちよつと大袈裟なぐらいに考えても損はないって、まだ来年の話なんだし」

重くなった雰囲気を払拭するかのように彼はそう言うと笑ってみせた。その表情がどこか叔父の笑顔と似ている気がして、要もまた自然に笑みを返していた。

題2：遭遇 - 2 -

話を挟んだせいか昼食だけで休みは過ぎてしまい、進路の話はそれきりとなってしまった。教室へ戻る間の話はゲームの話へと飛んでいたが、その途中で予鈴が鳴るのを二人は聞いた。騒がしかった廊下もそれを合図に生徒たちが教室へと戻っていく。ただ二人は先程通り過ぎたばかりの職員室で次の授業を担当する教師がいるのを確認しているので、それほど慌てる様子は出さなかった。

「今日15日だから指されるかも」

そろそろ教師別に指名するパターンが分かり始め、次の数学の教師は日付で黒板へと呼ぶことが多いというのがここ最近の傾向だった。けれどそれだと最大でも31人までしか当たらない計算となるので、男子その次に女子の順番で出席番号をつけるこの学校では主に当たる確率の高くなる男子に評判が悪い。

「要は良いよな、数学得意だし」

わざとらしいぐらい肩を落としながら達弘が羨望の眼差しを要へと向けた。けれどそこまでの視線を向けられるほど点数が良いわけでもないの、どこかくすぐったいような複雑な気持ちになっってしまう。

「その代わり達弘は歴史とか地理得意だから良いだろ。俺なんて叔父さんがいるのにそっちの方全然駄目だし」

色んなところを出歩いているせいか、叔父は地理だけでなく歴史文化にもかなりの知識を持っていた。けれど歴史といっても最近の政治経済となるとさっぱりで、もっぱら本棚の中も御伽噺に出てくるような千年も前の時代のものが多い。

「まあ、そっちの方がまだ身近な気がするし」

「俺なんて先週の話題すら殆ど覚えてないって」

あとほんの数メートルの廊下の角を曲がれば教室、というところであととうとう本鈴までもが天井の角に備え付けられたスピーカーから

流れ始めた。振り返るとまだ教師の姿は無かったが、代わりにこちらに向かって走ってくる生徒の姿があった。鐘の音が鳴り終えるまでに教室に間に合わせるつもりなのか、真っ直ぐに自分たちの方向を目指して走ってくる。

「は、っ……はっ……」

一生懸命走っている割にはパタパタと小さい足音と微かな息遣いと思わず様子を見守る要の耳をかすめた。彼女もまた立ち止ってまで見られていることに気付いたのか、ほんの一瞬俯くような仕草を見せた。そしてここで足を止めても不自然でしかないと考えたのか、彼女は少し速度を上げると道を譲るかのように廊下の端へと寄った二人に俯いたまま更に頭を下げた。

「す……すみません……」

見た目の雰囲気を表したような細い声だったがその割には良く通って聞こえた。

「あ、こ……こつちこそ！」

一体何がそんなにうるたえるほどの事なのか、要は自分でも分らなかった。慌てたまま「ごめん」と最後まで言葉を続けようとすると彼女はくりと身を隠すように廊下を曲がったところで、足音は躊躇いなくそのまま遠ざかって行った。

「……………」

遠くのどこかの教室でドアを開ける音を聞きながら、要は少女の消えた角をじつと見つめていた。目の前を通り過ぎたその間際、揺れた彼女の髪が一瞬だけ要の鼻先に舞い上がった。そしてそこからほんのわずかに涼しげな

「水………?」

水の匂い、要はそう呟いた。どうしてそう感じたのか分からない。呟いたその瞬間にはそれがどんな香りだったのかも忘れて、たった今すれ違った一人の生徒の横顔だけが要の印象に残るばかりだった。どれだけ立ち止まっていたのか、慌てて背中を叩く音で要の意識は直ちに現実へと引き戻された。

「かーなーめっ、ほら後ろすぐ先生来てるって！」

「…あら、そこにいるのは私の授業を受ける子だと思っけど…本鈴10分後にミニテストするって言ってあったのによっほど自信あるのかしら？」

「はい、それじゃあ本日はここまで。テストが40点以下の子は今日やらなかった応用問題の残りを解いて提出すること」

えー、と20点以下の生徒たちが一斉に声を上げるとそれがチャイムの音に代わって授業の終了の合図となった。その中には要の声は含まれていなかったが、代わりに達弘がブーイングの合唱に参加していた。

「何で三分しか予習する時間なかったのに要は76点も取ってるんだよー」

「その三分にかけたヤマがたまたま良かったんだよ」

不公平だと言わんばかりに達弘の視線が要の背中へと突き刺さった。それは自分の方が点をよく取れたという優位性より、自分のせいで予習時間を減らしてしまったという罪悪感の痛みを感じさせた。もしあの時立ち止まってなければ授業の間も何かと目を付けられて当てられることもなかったかもしれない。“けれど立ち止まっていなければ”、彼女のことを何も記憶しなかっただろう。

「綺麗な子だったよな、あの子」

時間が経てば経つほど要はすれ違った女子生徒の存在をその脳裏に思い描いていた。それは異性に対しての興味ではなく、ただ珍しいものを見たような雰囲気に近い。日本人形のような髪と整った顔立ちは今時珍しいタイプで、だからこそこんなにも気になるのかもしれない。一言で言えば間違いなく学年でも競えるぐらいの美人の類だったが、不思議と噂どころかその存在についても見たことも聞

いたこともなかった。

「あんな子同じ学年にいるなんて、去年とか全然知らなかったけど……転校生かな」

「……あの子って誰だよ」

まだ不貞腐れているらしく、達弘は机に頬をべったりとつけたままの姿勢で上目がちに要へと疑問の投げかけた。

「え、ほらあの子だよ。さっきすれ違った」

「さっきって？」

そこまで言ってもなお思い出せないように皺が寄って行く達弘の眉間を見ながら、要は少し意外そうに目を瞬きさせた。確かに一瞬のことだったが、それでも十分すぎるくらい彼女は他とは少し違う雰囲気をもとっていた。それともそう感じたのは自分だけだったのだろうか。

「ほら、先生に見つかる前にすれ違った女の子」

自分の認識を確かにしたように、要は念を押すような感じで再度達弘の記憶を促し始めた。まるで記憶が抜け落ちたのではないかと心配するほど他にヒントを出してもすぐに返事がなかったが、ようやくもう何年前かの記憶をぼんやりと出てきたように達弘の口から「ああ」と理解したような答えが返ってきた。

「そっぴや……いたけどあの子が何だった？」

「いや、ほら綺麗だったなって。達弘はあの子知ってたか？」

するとまた達弘は口を閉じると必死で思い出を探るように難しそうに顔を顰め始めた。どちらの質問について悩んでいるのかは分からない、前者なら確かに美意識や価値観の違いもあるだろうし、後者もただすれ違ったぐらいでは記憶していないかもしれない。どうやら彼が悩んでいたのは前者の方だったらしく、伏せていた顔をゆつくりと上げると悩むように首を傾げてみせた。

「綺麗……かあ？　なんか地味って感じだけど、大抵一人でいるみたいだし」

そうやって返す達弘の口ぶりはどうやら彼女のことを知っている

ようで、要は身体の姿勢を完全に後ろへと向けると続きを期待するように身を乗り出した。

「篠原だっけ…、そう篠原だ。去年、同じクラスだったけど…別に友達を作るわけでもないし行事があれば参加しないしであんまり良いイメージないな、はつきり言って」

「へえ…？」

彼の口から語られる言葉は見事に要の期待を裏切るものだった。

確かに一瞬しか会っていない彼女については達弘の方が詳しいだろう。むしろ自分の判断の方が行き過ぎていると言われればそれまでもしれない。

「勉強は出来たみたいだけど、あんまり気にするような子じゃないと思うけどな、俺は」

最後の「俺は」を少し強い口調で言うと、それは達弘だけでなく自分に対しても勧めているように聞こえた。それは彼女と一年間同じクラスで過ごした上での純粋な友人のアドバイスに違いない。確かにそう言われた後では要の中にあつた異性の興味はすっかり失われ、微かに残る好奇心の方も学校が終わる頃には忘れてしまっているだろう。

『だけど』

それでも何かが心に引つかかるのは、彼女に感じた不思議な感覚のせいだろう。清められた水の匂い、どこまでも澄んでいるのにそれが却って不安な気持ち覚えさせる。

「あ、雨だ」

誰かがそう言うと一緒に生徒の視線は窓へと集まった。朝のテレビでは一日中好天に恵まれると言っていたので、見事に外れてしまったらしい。要も窓の方へと目を向けると弱々しく降り始めたその様子をじつと見つめていた。

題3：遭遇 - 3 -

午後から降り出した雨は放課後になっても止む気配を見せなかった。帰り支度を終えた生徒たちの足はどこか鈍く、教室に残ってしばらく様子を見ようとする姿の方が多く見受けられた。購買部で用意していた傘はとつくに完売したようで、一度は教室を出たクラスメイトがそう言いながら戻って来た。

「要はどうするんだよ、傘持って来てないんだろ？」

「うーん、走って帰ろうかなって考えてるけど」

むしろ先程と比べれば落ち着いたようにも見える雨を眺めながら要は答えるとパチンと鞆の留め金を留めた。近いからという理由で選んだこの学校は自宅のマンションから徒歩で20分ぐらいのところにあった。偏差値もそれほど悪くはなく、叔父も近い方が安心だと納得した学校なので申し分の無い環境だった。

「達弘もどうせなら来いよ？ 今日叔父さん帰り遅いだろうし」

要は自分の家が近いからといって先に帰る気持ちは無かったように、そのまま達弘に誘いの言葉を投げかけた。彼を家に呼ぶのは今日が初めてというわけでもない。もう何度かは彼は要の家に訪れ、叔父の旭との顔も合わせていた。今日はバイトの無い日だと知っているし、そうしていつもの調子で来るものだと思っていたが、返ってきた答えは全く反対の言葉だった。

「あ、今日はやめとく。用事があるし、先に帰っててくれよ」

あまりにもあつさりとした断り方に要は「え」と聞き返した。別に用事があれば仕方の無いことだったが、即答で返されるとどこか寂しいものがある。用事に付き合おうかとも言いかけたが、さすがにそれは厚かましすぎると要は考え直した。

「分かった、じゃあ先に帰るわ」

「おう、また明日。気をつけてなー」

要は見送られるような形で教室を出ると、ほんの一瞬だけ達弘を

振り返った。けれど達弘はすでに背中を向けて窓の外だけを眺め、その視線は空よりも地面の方へと向けられていた。

「篠原、さん？」

それは予期もしないほど早い再会だった。一階の玄関ホールへとやってくると、一層雨の匂いが強くなったような気がした。人気がまばらになったホールは時折どこかの下駄箱から話し声が聞こえてくるだけで他は静まり返り、明かりも幾つかのライトに電源が入れられているだけで全体的に寂しい雰囲気漂わせていた。

そんな場所で、彼女は一人ガラス戸の横に立っていた。

「……？」

静かな空間はそれだけ音を運びやすいのか、自分では独り言のつもりが彼女の耳に伝わったらしい。細い後姿がゆっくりと要の方を振り返った。

『綺麗……かあ？　なんか地味って感じたけど』

要は達弘の言葉を思い出しながら、もしかしたら彼は誰かと勘違いしているのかもしれないと考えていた。身体の向きにつられて髪がさらさらと音を立てて肩から背中へと流れ落ちる。空気がいつもより湿度を含むせいか長い睫毛や唇がしっとり浮かび上がり、要は目のやり場に困るように視線を横へと逸らした。

「えっと、その……」

すでに要は彼女の姿を視界に入れてなかったが、彼女は迷わずじっと見つめているのが分かった。自分が呼ばれたことに対する次の言葉を待っているのだろう、けれども要はその視線に応えられなかった。ただ名前を呼んでみただけ、そういえば納得してくれるかもしれないが、それと同時に彼女との関係は完全に途絶えてしまいう気がして言う事が出来なかった。

「さつきはすみませんでした」

考えても言葉が思い浮かばない以上ここは正直に言うしかない、そう決意を固めた時だった。ぐずつく要に代わって先に言葉を繋げ

たのは彼女の方だった。慌てて視線を戻すと彼女は自分に向けて小さく頭を下げている。ただ廊下を譲っただけのことに、要は急いで靴を履き変えると彼女の方へと走り寄った。

「そんな別に良いから。こっちこそ、その、何か…悪かったし」

“何か”とは何か。走る様子をじろじろと眺めたり、いきなり名前を呼んでしまったりと謝るのはむしろ自分の方かもしれない。要は頭を下げると今度は彼女が不思議そうにその姿を眺めていた。

「私こそ、謝ってもらおうような事は何も無いですし」

「俺だってそうだよ。じゃあ もうこれでおあいこにしようか」

雨は少しずつ小振りになってきていたが、完全に止む気配は中々見せようとしなかった。要は隣で同じように外を眺める少女の様子を伺いながら再び話しかけるタイミングを探していた。遠くの物を見つめるような彼女の視線は微動だにせず、何を映し出して感じ取っているのか皆目見当がつかない。

『さっさと帰った方が良いか』

けれど折角会う事が出来たのに自分からこの時間を手放すのも惜しかった。殆ど初対面でしかない彼女を気にかけてしまう理由は一体どこにあるのだろう。異性としてか、もっと単純に見た目だけのところにしろか。今一つ自分の中で納得のいく答えが見つけれず、要はそこから立ち去ることが出来なかった。

「そう言えば、さっき…私の名前、呼ばれましたよね？」

今度も自分の中で結論を出すに考えている間に、彼女がふと思いついたように尋ねてみせた。数時間前までは赤の他人でしかなかったのに名前を知られていることを不思議に思ったらしい。自分を見上げるその顔に不快感が無いことを確認すると、要は少し安心した。「あの時一緒にいたやつが去年、その…篠原さんと同じクラスだっ

ていうんで、そこからちょっと」

「一緒にいた方、ですか」

あの時彼女は慌てていたせいであまり覚えていないらしく、軽く首を捻って「そうですか」と呟いた。

「宮路っていうやつだけど、覚えてないかな」

「…すみません、あんまり親しくなかったんで」

そう言う彼女はまだ小さく頭を下げた。親しくない、というのは達弘に対してのことなのか、それともクラスメイト全員に対してかかる言葉なのだろうか。相手が覚えてないというのならこれ以上強く記憶を促す必要は無い。

「それで…私のこと、何て言っていました？」

名前のことを尋ねる時よりも真っ直ぐな視線で彼女は続けて尋ねた。それまでは控え目な性格の持ち主と要は彼女のことを解釈し始めていたが、目の奥を覗くような強さは全く違う質の姿を示していた。

『地味って感じだけど、大抵一人でいるみたいだし』

『友達を作るわけでもないしあんまり良いイメージないな』

彼女の言葉に促されて達弘の言葉が脳裏を過ぎっていく。すると彼女の視線はまるでそれを読み取るかのように要の視線を捉えたまま、また要も逸らすことが出来なかった。一秒が一時間にも感じるような圧迫感に息をするのも忘れかけた時、ようやく彼女は眼差しを解いた。

「…あんまり得意じゃないんです、人と話すの。だから去年一緒だった人のことも殆ど知らなくて。だから…どんな風に思われてたのか聞きたいんです」

そう言いながら少し寂しそうに彼女は笑った。まるで先程の鋭い視線が錯覚だったかのようにその表情が儚げに要の目に映ると、とても聞いたままのことを言う気にはなれなかった。

「そいつは…大人しくて綺麗な子って言ってた。自分は騒がしいから…中々、その、近付けないって」

勿論、達弘からはそんな言葉は一つも無い。彼女に気を遣ってというのもあったが、殆どは要が素直に感じた気持ちそのままだった。そして彼女もまた要の言葉をどう感じたのだろう、頬に赤みが差すのが見えると一層小さな声で「ありがとうございます」と言うのが雨の音に混じって要の耳に届いた。

「あの、もし良かったら…」

顔が赤くなっているのを見られたくないのか、彼女はこれ以上無いぐらい顔を俯かせながら鞆を開いて一本の折りたたみ傘を取り出した。それは淡い黄色のシンプルなもので、彼女は傘を両手に乗せると「どうぞ」と言葉を添えて要へと差し向けた。

「これ…使って下さい」

「え、でも篠原さん…は？」

見たところ彼女がこれ以上の傘を持っている様子は無い。尋ねると彼女は首を横に振って答える代わりに校門の方へと目を向けた。そこには雨のせいではつきりと見る事は出来なかったが、人影が立っているのが分かった。その人は傘を差しながらその手にもう一本傘を持っているようで、おそらくは彼女はこの迎えを待っていたのだろう。

「だから使って下さい」

「じゃあ…折角だし借りても良いかな」

要は躊躇いながらも傘へと手を伸ばした。代わりに彼女の手から傘の重みが離れると、彼女はほっとした顔を見せてそのまま軽く頭を下げた。

「私　篠原澪里と言います」

「え？　あつ、ごめん…！　俺は市倉。　5組の市倉要」

あらためて彼女は自己紹介をすると、そこで要はまだ自分の名前を教えていない事に気付いた。今教えられた名前を忘れないように復唱しながら慌てて自分の名前を相手に告げると、彼女の目にどう映ったのかクスクスと小さな笑い声が聞こえた。

「市倉さんですね」

澪里は笑顔のまま要の名前を反芻すると、これ以上は迎えを待たせるわけにいかないように短く「それでは」と告げて校門の人影に向かつて走り出した。澪里の姿はこちらの返事を待たずにすぐに小さく遠ざかり、二つの影が一つの傘の下へと収まる。二人が並ぶと迎えの相手は身長はそこそこあるようで、おそらく男というのが分かった。

『家族かな、それとも…？』

そう無意識に考えながら眺めていればすぐにもう一つの傘が開き、澪里の後に男が続くような形で二人の姿がゆっくりと校門の向こうへと消えて行った。しとしとと雨の音がさっきより強く聞こえる。

「…じゃ、俺も帰るかな」

澪里から受け取った傘を開きながら、要はふと小さな視線に気付いて首を横向けた。するとさっきまで澪里が立っていた場所に今度は白い鳩が一羽、雨宿りをするようにじっと佇んでいた。まるで不思議なものを見るように丸い目が要を見上げている。

「何だよ」

鳥相手に何か言っても仕方ないことだったが、あまり見つめられれば鳩にまで心を見透かされているような気になってくる。それはあまり読まれたくない感情で、先程まで居心地が良かった場所が途端に悪くなるのを感じると、要は鳩の視線を避けるように雨の中へと足を踏み出した。

「篠原…澪里さん、か」

そうして要の姿もまた学校の外へと消えていくと鳥が一羽飛び立っていったが、その姿を見るものは誰もいなかった。

題4：雨の音

「あれ？」

傘についた雨粒を払いながら、要は玄関に脱ぎ捨てられた靴を見つけた。中まで濡れてしまっているのか、ひっくり返った靴の周りにはうつすらと水溜りが出来ている。どうやら叔父もまた傘を持って出掛けなかったらしく、玄関を上がったすぐ傍には濡れた靴下が丸めて置かれていた。

『サアアア……』

さつきから家の中にまで水音が響くので雨足が強くなったのかと思っていたが、それは風呂場の方から聞こえてきているらしい。要は靴下を拾い上げると点々と続く足跡を辿って音のする方へと向かって行った。

「叔父さん、ただいまー」

脱衣所も玄関と大差がないぐらい散らかった状態だった。よほど雨に打たれたのだろう、床に置かれた服を掴めばそれだけで手にじつとりと濡れた感触が伝わってくる。服を拾い集めながら要は浴室の曇りガラスに見える人影に声をかけると、少しだけその扉が開いて叔父が顔を覗かせた。

「あ、要君おかえりなさい……って、そ、そのままにしてもらって良いから」

視力の低い叔父は目を細めたところで自分が片付けをしているのに気付いたらしい。慌ててそう言ってきたが、言葉だけでどちらも言われて止められるものでもないというのは分かっていた。笑いながら片付ける要の様子に叔父は罰の悪そうな表情をすると再び浴室の向こうへと顔を隠した。

「今日は打ち合わせで遅くなるんじゃないかなかったっけ？」

「洗濯物干したままだし、後は飲みに行く話だけだからまた今度させてもらったよ」

「だったら携帯に連絡すれば」

良かったのに、と言いかけて要は口を噤んだ。もしそんな連絡があれば彼女との時間は無かっただろう。まだあれから一時間と経っていないかったがすでに記憶は曖昧で、思い出そうとすれば必ず雨の音が頭の中に響いた。

「要君、そろそろ出るけど良いです？」

「あ、うん、ちょっと待って」

洗濯機の前で要は叔父の声に気を戻すと、ポケットの中を確かめながら服を次々と放り込み始めた。財布と携帯が出てきた以外に他は無く、幸いその二つは雨には濡れてなかったらしい。棚の上にある眼鏡の横へと並べると要は茶色の革で出来た財布の表面を指で撫でた。しなびて薄い感触の伝わるそれはもう何年使っているだろうけれどどれだけくたびれても叔父は買い換えようとはしなかった。

『この財布はもう手に入らなくなってる』

よほど高いブランド物かと最初は思っていたが、どこでも売ってそうな聞いた事もない安物の財布だった。そういう意味では確かに手に入らない品物かもしれないが、要は叔父と暮らして少なくともこの十数年の間で彼が他にこだわりを持つところを見た事はなかった。

『これは君の両親がくれた物ですから』

何度か問いかけてようやく叔父はそう言った。笑みを浮かべているのにどこか寂しそうな表情になるのは決まって誰かの 自分の両親の話をする時にする彼の癖だと最近になつて気付いた。

要は両親のことを殆ど覚えていなかった。断片的に記憶は残っているものの、それもいつ忘れても、もしかすると忘れた事すら気付けないかもしれない。両親は駆け落ちのような形で結婚したらしく叔父以外に親戚という存在に出会ったことがなかった。そして唯一の味方となつた叔父も同時に勘当を言い渡されたらしく、一応は父親の死や自分のことも伝えているらしいが今日まで二人暮らしのまなのはそれだけ深い溝を作るほどのことだつたのだろう。

「叔父さん、今日の晩ご飯は俺が作るよ」

要は財布から指を離すとそう言っただけで浴室を後にした。

「そつといえは要君、玄関の傘はどうしたの」

夕食後の食器洗いをしながら、不意に思い出したように叔父が尋ねてきた。散らかった服や靴下は要が片付けたが玄関の靴はそのままに忘れていたので叔父がしまう時にでも見られたのだろう。

「借りたんだ、えつと……達弘に。置き傘があるっていうからさ」

要は咄嗟に嘘をついて答えた。後ろ暗いものがあつたわけじゃないがいきなり知らない、しかも女の子の話をするというのも照れるような恥ずかしさがあつた。きつと叔父の方もそんな話をすれば無駄に怪しんでからかってくるに違いない。

「そつ、良かったらまた家に連れてきたらどうか。ご飯ならいつでも招待するし」

「それが一番喜ぶつて。達弘つて料理あんまり上手じゃないし」

今日は用事があると誘いを断られたが、要としてもそのつもりだつた。そう言えば自分の方が先に教室を出たのに、あれから彼と会っていないことを思い出した。一時間ほどホールで零里と話していたので気付かなかつたということも無い。もし達弘の方が早く自分たちに気付いて裏門から帰つたのなら話は違ふけれど、そこまでする慮するだろうか。

『何の用事だつたのかな』

根掘り葉掘り聞くつもりも無いが、そうやって考え始めれば帰りの様子はいつもの彼らしかぬところがあつた気がした。素っ気無い態度は単に数学のテストが悪かつたせいかもしれないと思つたが、その用事に上の空になるような何かがあつたのかもしれない。

要は上着のポケットに入れていた携帯を取り出すと、達弘に向け

てメールを打ち出した。あまり変に探るような言い方でもおかしいので先ほど叔父が行った誘いをそのまま提案するような内容の文章を作ると、軽く送信ボタンを押した。

「今、達弘に明日どうかなくてメール入れたから」

「じゃあもし大丈夫だったら原稿料入るから、どこか食べに行こうか」

「本当に？ それも追っかけてメール送るかな…って、返事来た」
携帯につけられた表示板が光りながら達弘からの返事を伝えてきた。内容を確認すると誘われたことに対する喜びの返事で、一言なのに散りばめられるようにつけられた絵文字だらけの賑やかな内容を見る限りではいつもと変わりが無かった。

「明日大丈夫だって」

そんなメールを見た途端、僅かな心配はすぐに消え去って逆に明るい気持ちだけが要の心に残った。ほら、と携帯にメールを出したまま叔父の方へと向けると彼も同じ気持ちになったようで小さく吹き出してみせた。

「彼はいつも元気だね」

楽しそうに叔父は頷くと片付けを終えたテーブルの椅子へと腰をかけた。外は晴れたらしく雨の音は聞こえない。ちょうどテレビでも明日の天気予報が流れ、全国的に晴れるだろうという事だった。

「さてと、僕は部屋に戻るから、ここはお願いするよ」

「分かった、おやすみなさい」

天気予報はすぐに終わり、次の番組が始まる合間のCMに切り替わると叔父は席を立てて自分の部屋へと消えて行った。しばらくしてからキーボードを打ち出す音が聞こえてきたので他の仕事を片付け始めたのだろう。パソコンを持たない要は携帯でインターネットを見る事しか出来なかったが、コミュニティサイトを回るぐらいしか利用しないので特に不便を感じることは無かった。

『』

誰もいないはずの部屋で要は視線を感じて顔を上げた。テレビと

キーボードの音以外は聞こえない部屋はいつもと変わりなかったが、そんないつもにない視線が自分へと向けられている。要はぐるりと部屋を見回すと、開いたままのカーテンの向こうに一羽の鳥を見つけた。

「何でこんな所に」

そう呟きながら近付くとそれは鳩だと分かった。しかも頭から尻尾まで真っ白な姿に、要はすぐに学校で見た鳩のことを思い出していた。じつと自分を見つめてくる様子まで同じで、止んでいるはずの雨の音が戻ってくるような感覚を覚えた。

「まさかついてきたとか？」

自分で冗談だと分かりながらも呟いて窓越しに向かい合っていると、さつきは自分が退散したが今度は鳩の方が居心地を悪いと思ったらしい。うろつろと逃げ場所をベランダに探したが無いと分かるとその白い羽を広げてあつという間に飛び立った。

「…変な鳩」

キーを打つ音が一定のリズムで部屋の中へと響く。パソコンの画面にはワープロソフトが表示され、次々と文字が出て来てはソフトの画面を埋めていく。内容は旭が以前取材した村についての事で、手元のメモに乱雑に書かれた箇条書きの言葉が整えられた文章へと変わっていった。

「とりあえずこんな感じで、と」

しばらくして一通りメモがまとめ終わると旭は身体をほぐすように両手を真上に伸ばした。以前までは手書きで文章を書いていたがパソコンを買ってからは大分効率が良くなった。けれど便利になったと同時に肩が凝りやすくなった気もする。効率が上がった分仕事を増やしたせいもあるだろうが、これも生活の為には仕方が無い。

「…ん？」

軽い眠気を覚えて欠伸をしながら旭もまた視線を感じてすぐに窓の方へと顔を向けた。白い鳩が一羽、じっと旭の方を見つめている。先ほど要と視線を合わせあったように今度もまた旭と向かい合う状況になったが、ガラス越しに見詰め合っても鳩は微動だにせずベランダの外へ佇んだままだった。

「…」

旭はベランダの窓に手をかけるとそのまま横へと開いた。僅かに湿気を残した風が通り抜ける。彼は少し待って窓を閉めたが、中にも外にも鳩の姿は無かった。ただ一枚の羽が宙を舞って、ゆっくりと旭の手へと落ちただけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6459f/>

櫻の謳

2011年1月16日00時14分発行